

受け継ぎ、循環する社会を目指して

いしざかのりこ
石坂 典子

石坂産業株式会社 代表取締役

1972年東京都生まれ。92年、父が創業した産業廃棄物処理会社、石坂産業に入社。2002年に代表権のない「お試し社長」に就任し、数々の改革を断行。焼却事業から完全撤退し、建設系産業廃棄物のリサイクル事業に特化した。13年、現職に就任、「体験型環境教育フィールド三富今昔村」を発足。埼玉県で唯一環境省「体験の機会場」に認定。「循環をデザインする」を掲げ、他業種との共創・協働、太陽光パネル再資源所新設など、次世代を見据えた企業理念が支持を集める。

私が代表を務める埼玉県三芳町にある石坂産業では、おもに建設系産業廃棄物の中間処理を行っています。解体やリフォームで出る廃材などを引き受け、例えば木材はチップ化して段ボールなどの原料として資源化し、出荷しています。繊維くずなどと廃プラスチックを混ぜて固形燃料にしたり、あるいは複合建材に混ぜた金属類を取り出して再生したり、さまざまな形で行う減量化・リサイクル率は最大で98%にもなります。全国、そして海外55カ国以上から、私たちの取り組みに興味を持っていただいた見学者が、年に6万5千人以上訪れます。

創業したのは、私の父です。職人気質の社員らに、かわいがられ、土の匂いにする環境で育ちましたが、若いころはデザイン関係の仕事に就きたいと思っていました。そして高校卒業後にアメリカへ渡ったのですが、そこでネイルサロンを知り、日本での開業を志しました。帰国後に父の会社で働き始めたのは、その資金集めが目的でした。

業界には珍しく若い女性が受付にいる、それだけでも喜ばれました。廃棄物の搬入に来社されるお客さまを笑顔にするのが楽しい。最初に感じた「仕事の面白さ」かもしれません。同時に、つまらなさも感じました。問い合わせの電話に対応すると、お客さまが知りたいのは料金だけ。いらぬものを捨てるのだから、安い方がいい。産廃処理は世の中に必要とされる重要な仕事と思っていました。でも価格でしか選ばれない仕事はつまらない。それを変えたい。

父の想いを継ぐのは私しかない

しかし1999年、会社は大きな危機を迎えます。当社が立地する周辺のダイオキシン問題で、その発



工場見学通路から見た仕分け場。ここで人間の目と手によって木くずやプラスチック等おおまかに分別される。その後、種類ごと、工程ごとのプラントへ運ばれていく。

生源として疑われ、大バッシングを受けたのです。実際には最新のダイオキシン対策炉を導入していたので全くの風評被害だったのですが、そんなとき父に尋ねました。なぜ廃棄物処理業を起業したのか？ かつて廃材をトラックで東京湾まで運ぶ仕事をしてきた父は、まだ使えるものが多く「もったいない」と感じていたそうです。ゴミを捨てるのではなく、再び使えるようにする仕事がしたい。それが父の夢だったのです。

想いを継ぐのは私しかないと感じ、「私を社長にしてくれ」と直談判しました。でも女性には無理と却下されました。ようやく「お試し社長」として、やらせてくれることになりましたが、1年で実績を出せなければ解任。そんな条件つきでした。

当初、私が目指したのは、とにかく地域から愛される会社になることです。そのため、できることはすべてやる。工場を全天候型プラント化し、埃が飛散するのを徹底的に防ぐ。そして地域の方が見学できるように工場内に通路を設置し、誰が見ても恥



工場を囲む「三富今昔村」の広大な里山は、体験学習の場ともなる。この地の伝統農法である「武蔵野の落ち葉堆肥農法」は2023年に世界農業遺産に認定され、ここで集められた落ち葉も堆肥になり、野菜栽培に活用されている。当社が立地する三富新田は、17世紀末、川越藩主・柳沢吉保によって整備された新田集落の特徴が今もよく残っている。

ずかしくない、安全で整理整頓の行き届いた、気持ちのいい工場をつくる。

「出ていけ」から「ありがとう」もっとやれへ

当時、周辺の雑木林は荒れ、ゴミの不法投棄も多かったため、われわれはボランティアで清掃を始めました。でも拾うだけでは、また別のゴミを捨てられるだけ。里山を手入れし、「ゴミを捨てられない美しい場所」を目指すことにしました。

地道な取り組みを10年くらい続けるうち、地域の間も少しずつ変わってきました。整備した里山も一般公開を決め、2013年に今の「三富今昔村」ができました。「出ていけ」と嫌われていた会社が、少しずつ「ありがとう」「もっとやれ」と言ってもらえるようになった。振り返れば大変でしたが、当時の私はエネルギーにあふれていましたし、変わっていくのが楽しかった。

でも本当に変化をもたらすのは、やはり会社の人

かで働く一人一人。当初は、しつこいくらい時間をかけて「私たちは、何のために働くの？ この仕事でどう社会に役立つのか？」といったことを話し合いました。自らの頭で考えてもらうことが大切だと思っただけです。毎日、工場の奥まで入り、ロッカーの整理にまで口を出しました。ちゃんと掃除をしよう、お客さまには挨拶を……。女性から口うるさく言われるのが嫌で辞めていった社員もたくさんいました。苦い経験でしたが、やがて環境への理想や想いを共有してくれる若い人たちが集まってくれました。今は20代と30代で会社の半分近くを占めるまでになりました。

考えるきっかけとしての環境教育が必要

背景には価値観の転換もあるでしょう。今はリサイクルが当たり前となり、廃棄物を減らし（リデュース）、再利用しよう（リユース）という動きも目立ちます。「サーキュラーエコノミー（循環経済）」などの言葉も定着しつつあります。

テレビ取材を受け、本を執筆する機会にも恵まれました。疑いの目を向ける方々に工場を見てもらうため整備した見学の通路に、世界中から見学者があふれるようになったのも、時代の流れでしょう。とりわけアジアの発展途上国では、環境問題が非常に大きな課題になっていると感じます。人間がモノを作り、それが廃棄される。その処理について何も考えない、何も見ることがない人たちが多く。この工場を見てもらい、「考えるきっかけ」を提示したい。それが私の考える環境教育の基本です。いくら知識を身につけても、見たことないものに触れ、何かを感じ、考えなければ、決して本当の

意味で「腹落ち」しないから。

見学に訪れるさまざまな業種の方々と出会い、語りごとに耳を傾けて感じるのは、「分断」という共通する大きな課題です。組織や業界の中だけに閉じ込められ、新しい何かに触れる機会が圧倒的に足りないのです。

異質なものに出会う体験が足りない

これから特に取り組みたいと思っっているのは、人と人を結び付けることです。異質なものに出会うことで、新しい何かが創発する。最近では「越境学習（組織外での協働的活動を通じた学習）」という言葉も聞かれますが、企業だけでなく、社会全体にとつて重要な意味を持ちます。私たちが工場を含めた「三富今昔村」で、これからやっていこうとしているのも、人と人を結び付け新しい価値を生み出すことです。

ここには、たくさんのお子さんたちも、やってきます。社会科学見学などで訪れた後、両親や祖父母を連れてきてくれることも多い。「三富今昔村」には、さまざまな子ども向けのプログラムもあり、例えばここで平飼いされているニワトリの卵を、その場で卵かけご飯にして食べたり、昔ながらの農具を使って小麦や稲の脱穀をしたりといった体験も人気です。

こういう体験学習こそ、生き物であれ人であれ異質なものと出会い、感じ、考える「環境教育」でしょう。今の子どもたちには、そういう体験が不足していると感じます。だから社会に出て、異質な人と向き合う経験の中で心が疲弊してしまうのではないかと。学校も、知識だけでなく体験を得る場となり、家庭を含めた子どもたちの人生を豊かにすることが大切と考えています。